

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：32635

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17196

研究課題名(和文) 流域圏を単位とした文化の継承と生存基盤をめぐる研究 宮城県南三陸町を事例として

研究課題名(英文) The Cultural inheritance and survival basis based on Watershed Area - Case of Minamisanriku-cho, Miyagi prefecture -

研究代表者

山内 明美 (YAMAUCHI, AKEMI)

大正大学・人間学部・准教授

研究者番号：80710483

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：津波多発地帯である三陸沿岸地域には、行政区分とは異なる、流域圏での「支え合い」文化の実体がある。とりわけ、南三陸町歌津地区弘川集落を事例に、一見、限界集落と見做されそうな10軒の村が、500年間存続してきた歴史的事実を踏まえ、村内の自然資源、社会関係資本、人間関係資本の仕組みを分析した。

結論として、弘川集落が体現する持続可能なコミュニティは、10軒を支える自然資源(山林、田畑、川)との絶妙なバランス、集落全体が一つの「家族」を形成し、個々の「家庭」の私的領域が保たれていること、日常生活における豊かな生活資源交換の仕組みが欠かせないことなど、三陸型の生存基盤の実体が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In the Sanriku coastal area where tsunami is a frequent area, there is a substance of "supportive" culture which is divided into watersheds different from administrative divisions. Particularly, in case of village in the Minamisanriku-cho Utatsu-chiku Haraikawa-village, It is The 10 houses like Limit village. However, this village has historical facts that have survived 500 years. We analyzed the village's natural resources, social capital and Social capital structure. In conclusion, the sustainable community in which Haraikawa embodies, Exquisite balance with natural resources (forests, Paddy field, fields, rivers) that support 10 people, The entire village forms one "family", the private domain of individual "home" is kept, Structure of rich living resources exchange in daily life, Connection with relatives in watershed area.

研究分野：社会学

キーワード：東日本大震災 持続可能なコミュニティ 生存基盤 流域圏 森里川海

1. 研究開始当初の背景

津波多発地帯の三陸沿岸部の地域性を考慮した「復興」とは何かを捉えるとき、まず念頭に置かなければならないことは、当該地域の基幹産業である農漁業といった生業/暮らしが基盤としている自然領域と人間の関わりを再考することである。しかし、2011年以後の復興事業で提案されたのはスマートシティやコンパクトシティ(国土交通省)スマートコミュニティ(経済産業省)といった、シティ(都市)を念頭に置いた地域デザインであった。

一方、三陸沿岸部の里海、里山地域における災害時の助け合いは、「川上/川下」といった流域圏における自然資源をめぐる生存基盤の共有によって支えられた事実がある。2011年の津波災害でも、被災者は海から川沿いを遡って、内陸の農村集落で食糧を調達した。理解されにくいことであるが、一次産業を基盤とする地域では、豊かな森林、河川、海といった資源保全是、当該の地域住民にとって生存を左右するほどの重大な生きるための基盤である。(このことは、福島を取り巻く原発災害において、土壌や海を汚染された農業者、漁業者の苦悩が理解され難いこととも関わる。)

三陸沿岸地域には、いわゆる行政単位で把握されるコミュニティとは異なる、もうひとつの流域コミュニティ/生存基盤が存在しているのだが、この復興過程においても、その内実が検討されたとは言い難い。

農漁村地域の暮らしが都市と異なるのは、生活基盤が経済資本だけではない点にある。三陸沿岸部の地域にとって、経済資本だけに過度に寄りかかることは、かえって多様な資源に囲まれている生活背景から考えれば効率が悪いことにもなる。災害リスクを配分し、ひと、森里川海の資本といった分厚い基盤に支えられ暮らしが成立している地域社会が三陸沿岸地域であり、持続可能な地域を考えるうえで、現地の実体を知るための生存基盤調査が必要不可欠であると考えた。

2. 研究の目的

津波多発地域で培われてきた流域圏単位のコミュニティによる生存基盤の維持を、三陸沿岸地域の自発的な互助/住民自治と捉え、ひと、森里川海を基盤とした社会的共通資本の歴史的変遷と再編に関わる地域コミュニティの実体を把握する。

3. 研究の方法

(1)震災後の町の現状把握のため、南三陸町役場総務課、財政担当者への、財政面での聞き取り調査。

(2)南三陸町民が参加する「南三陸研究会」を立ち上げ、地域住民参加型のフィールドワークを定期的に行い、地域住民参加型の生存基盤研究を行った。これは住民が自ら地域

を発見し、地域のデザインに関わるための実践的方法として採用した。とりわけ、被災地域では、まちづくりの経験や知識が圧倒的に少ない中で、地域住民が「復興」に関わることが要求されるため地域を考える場が必要とされる。

(3)歌津地区弘川集落での質的調査(聞き書き、風土形成調査)

4. 研究成果

(1)被災地の行財政調査からの成果

被災自治体の財政調査については、本研究のはじまる2年前から着手しており、2015年は2度目の聞き取り調査となった。南三陸町役場総務課財政担当者のS氏に、町財政の動向と復興予算についてお話を伺った。今回は、埼玉大学経済学部で行財政をご専門とする宮崎雅人氏にも同行いただいた。

調査成果の概略としては、復興期間以後の被災自治体の経済的冷え込みがかなり深刻なものになるであろうという予測である。とりわけ、震災後20年から30年後のインフラ見直し時期にもっともその負担が大きくなり、破綻可能性も決して低くない状況である。

東日本大震災以後、南三陸町の人口は加速的に減少しているが、復興計画を立案した2011-2012年における人口規模で、インフラ整備をしなければならないため、希望する被災者の復興住宅がすべて建設できたとしても、10年後、20年後、30年後という時間経過の中で、人口減少に伴う膨大な数の復興住宅の空き室課題が残されている。また、かつての市街地が津波で消滅し、住宅の高台移転が決定している。9割に及ぶ事業所が流されたことで、町民から支払われる住民税や固定資産税などの安定的な収入の見込みが立たなくなっており、子育てや医療、教育といった自治体独自のサービスに予算を回せなくなることも推察された。

さらに、莫大な復興予算が投下されているものの、三陸沿岸部の小さな役場職員の人数で動かせる規模との落差があり、被災自治体職員の過労問題は極めて深刻であったことも把握された。また、沿岸部の湾港、防潮堤工事がはじまっていたが、2015年の時点では、当初の計画していた予算の1割しか消化できていないことも課題となっていた。これは、被災地のインフラ整備のための土木工事に関わる材料費が高騰し、入札が流れる事例が相次いだこと、土地相続手続きがなされないまま持ち主の許諾が得られず工事着工ができないこと、また湾港工事は高潮や台風のたびに中止せねばならず、スケジュール通りに、復興事業を進めることは不可能ということであった。

こうした財政調査から把握できたことは、この復興過程の中で、いかに住民の自治力を涵養していくかということである。自治体財政が一層困難な被災自治体が、持続可能な将

来を描くには、ある程度の「公共空間」を地域住民の自助努力で維持する必要がでる。

(2) 南三陸研究会による文化継承と生存基盤研究

町財政調査等を踏まえ、町民の自治力を涵養する方法として、地域を巻き込む実践研究として「南三陸研究会」を立ち上げた。

研究会の内容としては、申請者の専攻である社会学だけでなく、三陸沿岸の芸能・信仰といった民俗、災害史跡をはじめとする歴史遺構調査、三陸の風景がどのように形成されたかを知るための風土形成研究および地質研究、流域圏（八幡川、水戸辺川、伊里前川）の鳥・魚類調査など多岐にわたる全10回（いずれも1泊2日）のフィールドワークを開催した。各々の研究会には、南三陸に関わってこられた専門の先生もお招きした。

【文化の継承と生存基盤研究の意義と内容】

南三陸町内の民俗、芸能調査から

戸倉地区水戸辺の「鹿躍り」と、町内の神社が継承する「伝承切り紙」をテーマに、三陸文化について検討した。歌津地区水戸辺は、津波で漁村集落が壊滅したが、漁師が継承してきた「鹿躍り」が震災後最も早く復活を遂げ、仮設住宅でお披露目が行われた。また、伝承切り紙（ここではとりわけ恵比須の幣）は、各集落の神官が一子相伝で継承している御幣である。鹿躍りや伝承切り紙に映しこまれる情景は、地震や津波、飢饉といった自然と生きるひとびとの、自然へ対する身の施し様である。供養や多産、大漁といった生存維持のための「祈り」が、三陸沿岸地域にも残存している。また、今次災害でも、多くの芸能が再興されたが、人間の内側が復興するための手立ては、すでに歴史の中で準備されてきたといっても過言ではない。自然から離脱し、確立された近代社会に生きる私たちにあって、災害多発地域に継承されてきた「文化」の意味が忘却されてきたことは明らかであろう。本フィールドワークでは、南三陸の人々が歴史上の災害をふり振り返りつつ、そこで継承されてきた祭りや伝承の意味について深く掘り下げ、次の災害へ向けての文化継承について検討することも可能となった。

史跡フィールドワークから

高台移転に伴い、当該地が文化財等の史跡になっている場所も少なくないため、今次災害の復旧事業は、遺跡の発掘調査も行われた。例えば、南三陸町の新井田館は中世の館跡だが、大規模な発掘調査が行われ、発掘調査後に宅地造成のため切り崩され、史跡は消滅することとなった。

現在の暮らしと歴史遺産を取り換えることになったわけだが、歴史記録と記憶の蓄積についての切実さを地域住民に抱かせる出来事ともなった。

こうした経緯を踏まえ、災害史を遡りながら中世遺跡群のフィールドワークを行い、地名の由来、町割りや村々の形成など、震災前の町の原型ができた時代について学び、遺跡や史跡にどのような背景と、建立した人々の想いがあったのかを考える機会となった。

本フィールドワークにあたっては、元地底の森ミュージアム館長の田中則和氏にお力を得て、現在に続く南三陸の文化背景となった修験についても多く示唆を得た。

風土と地質調査から

風土形成研究の廣瀬俊介氏と地質学の永広昌之氏をお招きし、集落における暮らしのデザインがどのようにつくられているのか、また南三陸の地盤となっている（つまり、生存そのものを規定づけている）土壌がどのようになっているのかを、実際に町内を歩きながら検証した。花崗岩帯ではかつて金が産出されていたし、スレート石は、民家の屋根の材料として使われてきた。

三陸沿岸部の「生活世界」が、どのように構築されているかについて、地域の生業とともに検証した。

伊里前川流域圏の調査から

3年間の本研究で、もっとも力を入れたのが伊里前川流域圏の調査である。その理由は、復旧事業における工事の規模がかなり大きく、河川と海環境に与える影響が少なくないのではないかと予想されたためである。

もっとも、河川や海環境の変化について知るためには、3年の継続調査では不十分であり、気候変動なども考慮に入れつつ、数十年単位での継続調査が必要になる。とはいえ、三陸沿岸部の風景改変は、現在進行形で激烈に進んでおり、とりわけ巨大な防潮堤工事によって河川環境が大きく変化したことは事実である。

漁師からの聞き取り調査、伊里前川の生態調査は継続的に行ってきた。2016年の聞き取り調査ではワカメとアワビの極度の不漁に悩まされ、ナマコで乗り切ったというお話を伺い、またコンクリート工事の過程で何らかの化学物質が海に流れているのではないかと不安の声を受け、伊里前川河口と湾底の土壌を採取し、専門機関での検査も行った。検査結果は、カリウムが多いということ以外には特に問題は指摘されなかったものの、具体的な数値があらわれなくとも、毎日海で仕事をしている漁師が海の異変に気がつくことは少なくないだろう。震災後の河川、海環境の変容調査は引き続き、継続していく必要がある。

(3) 歌津地区弘川集落での質的調査から

歌津地区弘川集落は、地域の霊峰田束山の麓にあって、かつては修験者が弘川でお清めをしてから山の修行へ赴いたといわれている。寺の縁起によれば、500年ほどの歴史の

ある村だが、家の数は 10 軒しかない。つまり、弘川集落は 10 軒で 500 年続いてきた村である。(注：地域での聞き書きと、寺の文書によれば 10-11 軒で構成された村であることが分かった。)山の奥に 10 軒ばかりの家々が集まっている状況だけを見るならば、誰もが、「ここは限界集落か」と思うに違いないのだが、500 年も続いてきた 10 軒の村を、果たして限界集落と呼べるものだろうか。

そこで、たった 10 軒しかないのに、500 年も続いてきた集落のメカニズムについて調査を行った。

結論的概要を述べれば、10 軒を支える自然資源(山林、田畑、川)とのバランス。集落全体が一つの「家族」を形成し、個々の「家庭」の私的領域が保たれていること、日常生活における集落内の生活資源交換の仕組み 流域圏を単位とする物的、人的交流(山の幸と海の幸の交換)の 4 点から、弘川集落の持続可能性を意味づけることができるであろう。

自然資源について

学生も伴い、田畑、庭木、山の幸といった食糧面での散策調査を網羅的に行った。コメ、麦、蕎麦、大豆、小豆、コンニャク、大根、人参といった野菜類だけでも 50 種類ほど栽培されており、また庭木ではクルミ、栗、柿、スモモ、キウイ、ブルーベリー...といった具合に多種、山菜類については筍、ワラビ、コゴミ、タラの芽、キノコ類...など数えきれないほどの種類がある。ざっと 300 種類ほどの食糧が基盤にあり、葉草類まで調べればもっと多様性が見えてくるであろう。こうした自然の恵みは、背景となる里山資源が 10 軒の集落を支えるのに十分であるが、もし弘川集落が 50 軒や 100 軒であったなら持続できなかったかもしれない。また、その村の名の通り、身を清めるほどの清らかな小川が流れているのだが、同様に質の高い水資源に恵まれ、大正期には水車による自家発電も行われていた。いずれにせよ、背景となる自然資源と人口のバランスを崩せば、山の資源は枯渇し、川は汚染されたであろう。これが、10 軒の村だから持続可能となった、ひとつの要素である。

集落の構成とデザイン

弘川集落は 10 軒がひとつのユニットとなっており、大きな「家族」としての村である。日常生活でのインフラ整備は、「家族」で行うが、一軒一軒の「家庭」は独立し、各々の私的領域は守られている。食糧と情報のやり取りは大変活発である。村落共同体のメリットでもあるが、一方で濃密な人間関係が負担になる側面もあるようである。

さらに、風土形成調査では、弘川が増水した時のために、家々の基礎が高くなっていることや、小川を利用した洗濯などの作業のための石の配置、石垣の形状など、快適な暮らしのためのデザインが集落のいたるところにあった。水害、日照り、大雨といった繰り返

返された災害の中で、歴史の経過とともに、豊かな集落デザインが形成され、500 年持続してきたことが伺えた。

また、弘川から漁村へ嫁いだ女性、逆に漁村から弘川へ嫁いだ女性など、家と家とのつながりが、普段は山の幸 海の幸の交換であっても、非常時にはそれがまさにライフラインとなり、津波のあとには、弘川に食糧調達や洗濯に来る被災者が多くいた。

村のデザインから、災害時の動態メカニズムまで、10 軒ばかりの弘川集落にその要素を読み取ることができたことは、申請者も調査しながら大変驚いたのだが、三陸沿岸部の持続可能なコミュニティの姿が体現されているように思える。そこには、豊かな食糧資源、風土(精神的、景観的) 人的つながりがバランスよく配置されている。

また、ひとつ加えると、10 軒の弘川は、十数年前までは 11 軒で営まれており、うち 1 軒は町内の漁村へ移住したため、空き家となっていた。その空き家に、2 年前から若い夫婦が引っ越し、古民家を改築し、民泊をはじめようとしている。新しい家族がまた誕生しても、村のみんなで育てることになるだろう。

引用文献

宮崎雅人、報告資料「南三陸町財政の分析」、2014 年、3・11 研究会報告(大正大学)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

1. 山内明美、大正大学人間学部人間環境学科、2016 年、「《三陸世界》と鹿(シシ)躍りのはじまり 災害と向き合う暮らし」、『大正大学人間環境論集』第 3 号、53-62 頁。査読なし。
2. 山内明美、大正大学人間学部人間環境学科、2017 年、「《三陸世界》と鹿躍りのはじまり 「鹿踊り」の発生にまつわる研究史」、『大正大学人間環境論集』第 4 号、23 - 30 頁。査読なし。

[学会発表](計 1 件)

1. 弓山達也(代表)、山内明美、星野壮、稲葉圭信、齋藤智明、パネルディスカッション「震災後の宗教とコミュニティ 関与型調査からの再考察」、日本宗教学会第 75 回学術大会、2016 年。

〔図書〕(計 2 件)

1. 山内明美 (共著) 岩波書店、2016、「圏域のディアスポラ 東北をめぐる水平的断層」所収『グローバル化の中の政治』(岩波講座 現代第4巻) pp13-33.

2. 山内明美 (編著) イニユニック、2018、『南三陸の森里海』、総ページ 61 頁.

〔その他〕

ホームページ等

<https://subsistence311.wordpress.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山内 明美 (YAMAUCHI, Akemi)
大正大学・人間学部・准教授

研究者番号 : 80710483

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし

(4) 研究協力者

赤坂 憲雄 (AKASAKA, Norio)

(学習院大学・文学部・教授)

川島 秀一 (KAWASHIMA, Syuichi)

(元東北大学・国際災害科学研究所・教授)

宮崎 雅人 (MIYAZAKI, Masato)

(埼玉大学・人文社会科学部研究科・准教授)

廣瀬 俊介 (HIROSE, Shunsuke)

(東京大学空間情報科学研究センター・協力
研究員)

永広 昌之 (EHIRO, Masayuki)

(東北大学・総合学術博物館・協力研究員)

田中 則和 (TANAKA, Norikazu)

(元地底の森ミュージアム館長)

阿部 拓三 (ABE, Takuzo)

(南三陸町・産業振興課)

鈴木 卓也 (SUZUKI, Takuya)

(南三陸ネイチャーセンター友の会・会長)

佐藤 賢二 (SATO, Kenji)

(山階鳥類研究所・標識調査室・協力調査員)

旗 薫 (HATA, Kaoru)

(宮城県希少野生動植物調査会・魚類分科会
調査員)